The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	大学の初年次教育に対する教員意識の大学間比較
Author(s)	稲澤, 祐哉
Citation	令和元（2019）年度学部学生による自主研究奨励事業研究成果報告書. 2020
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/76007
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式６

申請先学部　全学教育推進機構　採択番号　No.1

２０１９年度大阪大学未来基金【住野勇財団】学部学生による自主研究奨励事業研究成果報告書

ふりがな 氏名	いなざわ　ゆうや 稲澤　祐哉	学部 学科	人間科学部	学年	１年
ふりがな 共同 研究者氏名		学部 学科		学年	年
					年
					年
アドバイザー教員 氏名	佐藤　浩章	所属	全学教育推進機構		
研究課題名	大学の初年次教育に対する教員意識の大学間比較				
研究成果の概要	研究目的、研究計画、研究方法、研究経過、研究成果等について記述すること。必要に応じて用紙を追加してもよい。（先行する研究を引用する場合は、「阪大生のためのアカデミックライティング入門」に従い、盗作剽窃にならないように引用部分を明示し文末に参考文献リストをつけること。）				

1.本研究のきっかけと目的

私は今年度入学した、一人の学生である。この大阪大学では今年度から新たに、「学問への扉」という名前で必修の初年次教育を始めており、その授業を実際に私は受けた。高校までの探究型学習のようなものが行われていると思っていたが、実際は、授業全体が講義型の授業であった。探究型学習を経験していた私にとって、その授業は知的好奇心をそそられるものではなかった。

このような背景がきっかけとなり、学生にとって有意義な授業を作るにはどうすればよいかを研究することとなった。

本研究では、初年次教育の目的と現状の問題を踏まえたうえで、大学の初年次教育に対する教員の意識と、その意識からつくられる初年次教育の授業の内容を比較・分析する。また、制度・学生の意識によって有意義な授業内容が異なることも考えられるため、他大学の初年次教育の実践とも比較する。そこから導かれた結果から、学生にとって有意義な授業をするには、教員の意識はどうあるべきかを明らかにすることを目的とする。

2.研究方法

①初年次教育の現状の問題の調査

・大阪大学の「学問への扉」の内、日本語で開講されている全 226 の授業を、シラバスに書かれている内容をもとに、「授業の形式」・「授業の目的と概要・学習目標」で分類する。

・大阪大学が行っている入学時アンケートのいくつかの項目を調べる。

②初年次教育の実践の比較調査

・全 6 大学（大阪大学、国立大学 3 校（内 2 つが研究大学）、私立大学 2 校）で行われている初年次教育の授業を調査する。これらの大学を選んだ理由としては、大阪大学と似た学生と違った学生のデータ上での違い、また多様な実践との比較を扱いたかったからである。（以下、国立 A 大学、B 大

学、C 大学（研究大学 A、B)、私立大学 D 大学、E 大学とする。）
・可能であれば実際に授業を見学させて頂き、難しければインタビューを行った。
・日程、予算の事情により、A 大学、E 大学からは 2 つ、他大学は 1 つの授業を取り上げた。
・また D 大学については、初年次教育からつながる授業も取り上げることとした。これは D 大学の初年次教育が、学部混合のものでなかったからである。

3.研究経過

Ⅰ　A 大学について
・7 月 30 日、初年次教育を担当された教員の方にインタビュー
・10 月 23 日、初年次教育を担当された別の教員の方にインタビュー

Ⅱ　B 大学について
・10 月 7 日、実際の初年次教育の授業見学・今後の打ち合わせ
・11 月 18 日、実際の初年次教育の授業見学

Ⅲ　C 大学について
・10 月 23 日、初年次教育を担当された教員の方にインタビュー

Ⅳ　D 大学について
・8 月 2 日、初年次教育を担当された教員の方にインタビュー
・10 月 10 日、初年次教育からつながる、文理融合型少人数授業の見学

Ⅴ　E 大学について
・9 月 25,26,27 日、実際の初年次教育の授業見学・今後の打ち合わせ
・10 月 30,31,11 月 1 日、実際の初年次教育の授業見学

その他
・大阪大学の初年次教育の制度について、村上正行先生にインタビュー
・大阪大学の学生アンケート結果のデータについて、山下仁司先生に提供依頼

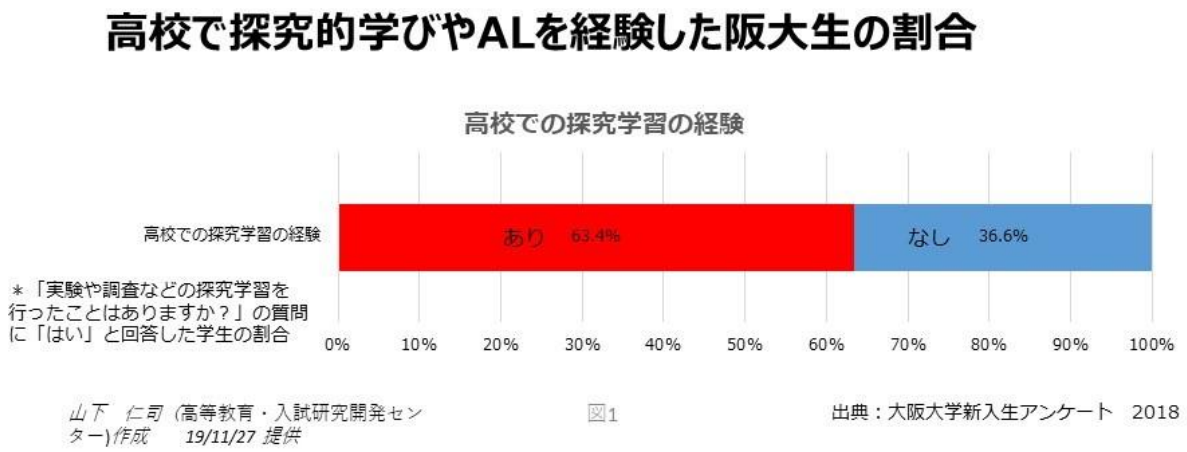
4.成果報告

1. 初年次教育の背景

初年次教育は、大学が社会から求められる学位授与の質の保証が要請された（中央教育審議会答申（以下中教審答申）(2005)「我が国の高等教育の将来像」）ことにより、それに応える形で開始された。その中で、初年次教育は「進学率の上昇による学生の多様化や学生の価値観等も含めた変容に対応するための処方箋としての『初年次教育』」だけでなく、「学士課程教育全体をプログラムとしてみなした場合、重要な第 1 ステージとして捉えるべき」（山田　2012）とされた。つまり、初年次教育は多様化する学生を大学の学びにつなげることが目的である。

また最近では、SSH や SGH、また来年からは WWL といった高校の多様化が進み、それによって探究学習を経験する学生が多く存在している。このことは、大阪大学の行っている入学時アンケートの結果(図 1)からも明らかである。また探究学習の必修化により、その割合はさらに大きくなるだろ

う。そのような学習をした学生にとって、「処方箋」のような授業では退屈になってしまいかねない。



2. 初年次教育の目的

初年次教育の設計目標と到達目標は、大学生活に移行する際の支援、基礎的学術技術（アカデミックスキル）の獲得である（山田　2012）。また、中教審答申「学士課程教育の構築に向けて」（2010）で出された「学士力」では、「コミュニケーションスキル」「情報リテラシー」「問題解決力」「リーダーシップ」「市民としての社会的責任」が挙げられている。これらは、ハーバード大学一般教育報告書で明示されている教育目標であり、米国では共通教育・一般教育を通じて獲得される大学教育の成果と認識されていることが一般的である。（山田 2010）よって、これらの能力の基礎をつけることも初年次教育の目的であり、目標である。前者は大学での学びに順応することが目標であるのに対し、後者は大学を卒業した際に身についてほしい基礎を作ることが目標である。多様化する学生にとって、このどちらの目標も必要である。今までの、大学の学びへの接続を潤滑に行うためでもありながら、その接続がすでにできている学生にはさらなる学びを提供することが必要である。

3. 初年次教育の現状

中教審答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」（2012）によると、社会に貢献していく人材を育てるには、教員と学生が意思疎通を図りつつ、学生が主体的に問題を発見し解を導き出していく能動的学習が必要であるとされている。また上記のとおり、初年次教育の目的には大学での学びへの接続と社会で必要な能力の養成がある。これらを踏まえたうえで現状の初年次教育を分析する。

まず、学生の現状からみる。同入学時アンケートの結果(図 2)をみると、探究学習を経験した学生は、経験していない学生に比べて、プレゼンテーション能力や批判的思考力といった大学での学びに必要なスキルとリーダーシップや課題解決能力を持っていると考えている傾向にある。

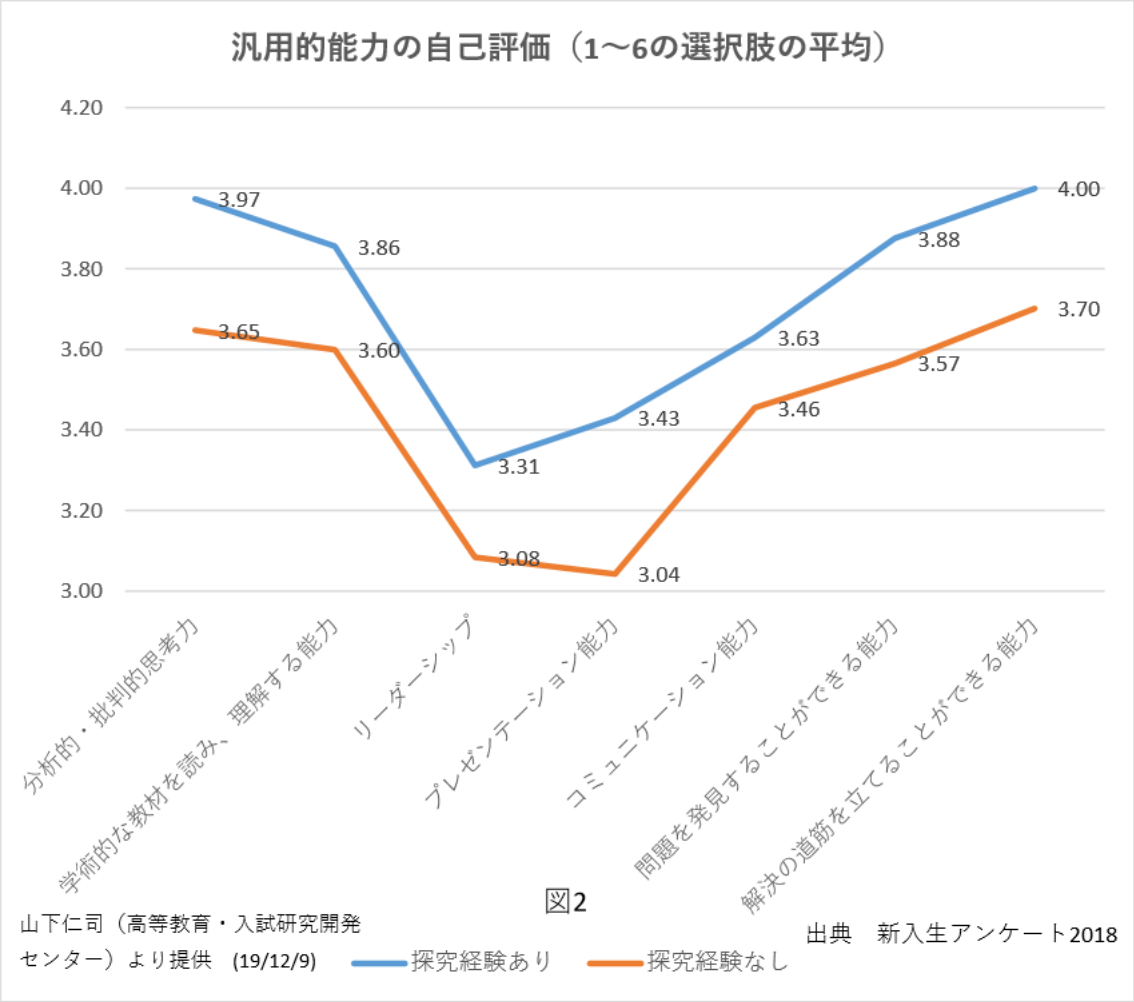


図2

t検定	p<0.001	p<0.001	p<0.001	p<0.001	p=0.0016	p<0.001	p<0.001
Welchの方	p<0.001	p<0.001	p<0.001	p<0.001	p=0.0018	p<0.001	p<0.001

そのような学生にとって、入門編のような内容の授業は満足いくものではないように思われる。探究学習の必修化によってそのような学生が増えることを考えると、より発展的な内容も扱う授業が必要なのではないだろうか。

それを踏まえたうえで、授業の現状から見る。大阪大学の初年次教育（「学問への扉」）の日本語で開講されている全 224 の授業の目的及び目標について調べると、大学での学びへの接続のみが含まれているもの（図書館を使って情報収集ができるやプレゼンテーションのやり方を学ぶなど）が 92、大学での学びへの接続も社会で必要な能力の養成のどちらも含まれていないものが 64 であった。つまり、全体の 2/3 以上の授業は、これら二つの要素を満たしていないことになる。これでは、多様化する学生にとって有意義な授業を十分に行えないのではないだろうか。また、講義形式の授業が 91 と 1/3 以上を占めていた。探究学習を経験した学生にとって講義形式の授業は、自分たちで探究するという主体性が奪われるように感じる授業であるため、この現状は学生にとって有意義な授業を提供できていないのではないかと感じられる。

4. 初年次教育の大学間比較

この現状は他の大学でも当てはまるのだろうか。

それぞれの大学の初年次教育の授業と比較して分析した。調査方法は上述の通りである。

観点については大きく「制度面」「方法面」の二つに分け、それぞれいくつかの項目から比較した。それぞれの項目について説明する。「制度面」では、それぞれの大学における初年次教育の位置づけを表すものとして考えられるものを採用した。また「方法面」では、「授業形式」及び、大学での学びへの接続の観点として「学生が能動的に学ぶ時間」「授業で扱う内容」、大学卒業の際に身に着ける必要のある能力の基礎をつけるための観点として「毎回の課題」また、教員の意識そのものの観点として「成績のつけ方」「つけようとする能力」を採用した。

結果を表 1,表 2 に示す。

初年次教育の大学ごとの制度面(表 1)

	大阪大学	A 大学（国立）（研究大学）	B 大学（国立）（研究大学）	C 大学（国立）	D 大学（私立）	E 大学（私立）
時期	前期	前期	前後期	前期	前期*	後期**
必修	必修（授業選択可能）	選択	必修***（授業選択可能）	必修（授業選択可能）	必修（授業選択不可）	必修（授業選択不可）
学部	混合	混合	混合	完全混合	学部ごと	完全混合
			***理系は前期のみ必修		*2 年後期に学部混合あり	**前期に学部ごと（必修）

初年次教育の方法面(表2)

	大阪大学	A大学	A大学	B大学	C大学	D大学	*D大学	E大学	E大学
調査方法	実際に受けた	インタビュー	インタビュー	見学	インタビュー	インタビュー	見学	見学	見学
授業形式	講義	輪読形式	演習・講義/プレゼン	輪読形式	グループディスカッション/プレゼン	スピーチ・ディベート/プレゼン	ディスカッション・講義/PBL	PBL	PBL
学生が主体的に学ぶ時間	ほぼなし	半分程度（学生・教員間がほとんど）	半分以上	ほとんど（発表・コメント）	半分以上	半分以上（発表）	半分以上	ほとんど	全て（初めの3分のみ）
扱う内容	ロボット	科学（難しめ）	教育	地球温暖化	心理・キャリア	自分のこと・自由	犯罪と光	自由	自由
毎回の課題	なし	指定個所を読む・担当の時はレジュメ作成	なし	指定個所を読む・担当の時はプレゼン作成	資料を読む	スピーチ原稿作成	毎回違う（シラバスに記載）	毎回違う	毎回違う
成績のつけ方（出席を除く）	プレゼン（2回）・最終レポート	レポート2回	プレゼン・レポート（レポートが全体の60%）	プレゼン・ディベート	プレゼン	レポート・プレゼン	レポート・PBLの成果・プレゼン	毎回の課題・最終発表	毎回の課題・最終発表
つけようとする能力（シラバスのみ）	問題そのものを疑う能力・文理に捉われない思考	学問の基礎となる考え方・論理的な文章の読み書きの能力	内容に関する理解・批判的に読み、議論し、書く揚力	深く物事を考える能力・プレゼンテーション能力	内容に関する理解・知識を他者に伝える能力	自己表現力・論理的な議論を行う能力・文章力・プレゼンテーション能力	内容に関する理解・課題解決能力	企画力（問題発見・課題解決能力）	問題発見・課題解決能力

制度面では大きな差はなく、平均すると、前期に行われる必修の学部混合の授業であるといえる。しかし方法面では、各大学で様々な特徴がみられた。特に分析すると、研究大学は主に大学での学びへの接続を意識したものが多く、逆に私立の大学では、卒業後に必要となる能力を意識したものが多かった。特に「成績のつけ方」や「つけようとする能力」では顕著であった。またその意識の違いに沿うように、「授業形式」や「扱う内容」、「学生が能動的に学ぶ時間」にも違いが表れている。

また実際のインタビューでも、研究大学の教員は「大学で学ぶ際に必要な思考力をつけさせたい。」「プレゼンをできるようにさせたい。」などの声が多く、私立の教員は、「就職に活きる力をつけてほしい」や「社会に出てからも必要とされる力をつけさせたい。」など声が多かった。

ただし、研究大学の教員の中にも「社会が求めることを意識するように」「学生にも問題意識を持たせるように」というような声もあった。このことから、研究大学の教員も、社会から求められる能力をつける必要性は感じているように思われる。

5.結果からの考察

教員の意識そのものが、授業形式や内容、学生が能動的に学ぶ時間に影響を与えていることが読み取れる。つまり言い換えると、教員の意識によって授業方法が変わり、それによって身につく能力も違ってくるのである。とすれば、教員は、教員自身が必要であると思う能力を伸ばすような授業づくりをしているということである。ここで問題になってくるのが、その意識である。現在の学生の状況

や社会の要請とその意識に差異があると、学生にとっても、そして社会にとっても有意義でない授業になってしまいかねない。教員は授業を設計する際に、自身の思うつけたい能力だけでなく、学生や社会の要請を考慮したうえで、本当につける必要のある能力もつけられるようにするべきである。

またその教員の意識は、大学の属性によって異なっているように推測できる。大阪大学の初年次教育の問題はほかの研究大学でも同じように当てはまっていると考えられる。とすれば、これは研究大学における初年次教育全体の問題である。初年次教育を担当する教員はこの問題を意識したうえで、授業設計をして欲しいと思う。

6.本研究の課題

本研究には、サンプル数が少ないという問題点が挙げられるだろう。これは各大学の 1,2 つの授業を、各大学の傾向としてよいのかということである。実際大阪大学の初年次教育の授業にも、大学への学びの接続と社会から求められる能力の基礎づくりを目的としたものはいくつもある。しかしながら、予算執行の期限もあり、これ以上扱うのは難しかった。また、大阪大学の初年次教育の授業の傾向から見ても、今回のデータが外れ値であるとは考えにくい。多少のずれがあったとしても、大まかな傾向としてはこの結果通りとなるだろうと推測される。

また本研究では初年次教育について、大学間での比較を通して、教員の意識から問題点を分析したものである。しかしこれは、初年次教育の問題の一部分にすぎない。今回は深く扱わなかったが、学生の多様化による意識の変化と差の問題、カリキュラム内での初年次教育の位置づけという制度の問題など、初年次教育の問題は根深いものがあると思う。今回得た知見が他の側面からの研究結果と組み合わさることで、より学生にとって有意義な初年次教育となることを期待する。

7.参考文献

・中央教育審議会答申,(2005).我が国の高等教育の将来像
(http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/05013101.htm) (19/12/7 閲覧)
・山田礼子,(2012).学士課程教育の質の保証にむけて一学生調査と初年次教育から見えてきたもの一.東信堂
・中央教育審議会答申,(2010).学士課程教育の構築に向けて
(http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1217067.htm)(19/12/7 閲覧)
・山田礼子,(2010).「学士課程教育」はどのような課題を提起しているのか一現状から課題へ. 大学教育学会誌,第 32 巻第 1 号,pp45-53
・中教審答申,(2012).新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～
(http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325047.htm)(19/12/7 閲覧)
・Reinventing Undergraduate Education: Blueprint for America's Research Universities, The Boyer Commission on Educating Undergraduates in the Research University, 1998,15-22
・濱名篤,(2007).日本の学士課程教育における初年次教育の位置づけと効果.大学教育学会誌,第 29 巻第 1 号,pp36-41